

## 奈良・大安寺旧境内

- 1 所在地 奈良市大安寺一丁目～四丁目
- 2 調査期間 第五七次調査 一九九三年(平5)五月～七月  
第六四次調査 一九九四年二月～三月

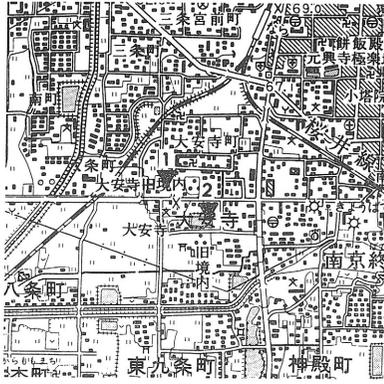
3 発掘機関 奈良市教育委員会

4 調査担当者 三好美穂

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良・桜井)

奈良時代の大安寺は東西両塔を南大門の南に配した伽藍配置をもつ大寺院で、平城京の左京六条四坊と七条四坊にまたがる一五町の寺域を占めていた。奈良市教育委員会で一九八〇年からこれまでに大安寺旧境内で計六四回の発掘調査を実施している。一九九三年度は八件の発掘調査を実施した。このうち、

大衆院推定地の第五七次調査区と苑院推定地の第六四次調査区で木簡が出土した。

### 一 第五七次調査区

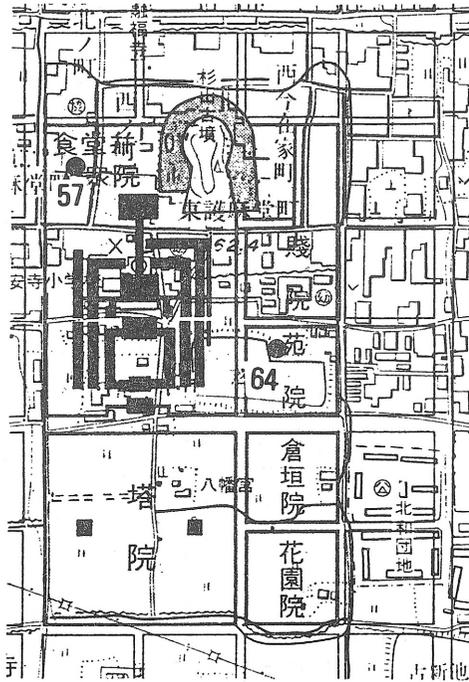
大衆院推定地内ではこれまでに一二次の発掘調査を実施しているが、奈良時代の建物はわずかに二棟が検出されているだけである。今回の調査では、奈良時代の掘立柱建物・井戸・土坑・平安時代から室町・江戸時代の掘立柱建物・井戸・土坑・素掘りの溝など多数の遺構を検出した。このことから寺域の北辺は室町時代から宅地化したことがわかった。

木簡が出土したのは、奈良時代の井戸SE〇二である。井戸掘形は平面形が方形で、一辺が二・二mから二・四m、検出面からの深さは約四・五mである。井戸枠は方形横板組隅柱留で、内法が〇・九mあり、横板は九段分が残っていた。

井戸枠内からは木簡のほか、奈良時代の後半から末にかけての特徴(平城宮土器Ⅳ～Ⅵ)をもつ土師器・須恵器・墨書土器・軒瓦・横楯・人形・独楽・鎌・工具柄・籠・曲物・棒状木製品・鉄釘・銅滓・ふいごの羽口・漆紗冠が出土した。墨書土器は六点あり、25頁図版の1は「大安寺」、2は「大寺」、3は「大安寺左右酒」と読め、このほか「寺」「右家」と読めるものがある。

### 二 第六四次調査区

苑院推定地では、これまでに七次の発掘調査を行ない、奈良時代



大安寺伽藍配置図と調査地点

の掘立柱建物や塀が検出され、奈良三彩陶器、土師器、須恵器などが出土している。今回の調査では、奈良時代の掘立柱建物一棟、井戸一基、素掘りの溝一条、土坑及び平安時代の掘立柱建物三棟、掘立柱塀一条、土坑を検出した。苑院推定地内で平安時代の遺構を検出したのはこれが初めてである。

木簡が出土したのは、奈良時代の井戸SE〇二からである。井戸掘形は平面方形で、一辺が一・八mから二・二m、検出面からの深さは約二・四mである。井戸枠は井籠組で、内法は〇・八五mである。横板は九段分が残っていた。木簡は井戸枠内の灰色粘土層から出土した。この層からは奈良時代の中頃から後半にかけての特徴を

もつ(平城宮土器Ⅲ・Ⅳ)土師器、須恵器を始め、墨書土器や軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、製塩土器、土馬、曲物、棒状木製品と多量の木屑が出土した。墨書土器は一四点あり、図版の4は「東院」、5は「光」と読め、ほかに「大」「家」「維」「高」と読めるものがある。4は早良親王が神護景雲三年(七六九)から天応元年(七八二)まで大安寺に住まいした場所として知られる東院(「大安寺碑文」「大安寺崇道天皇御院八嶋両処記文」など)との関連が注目される。

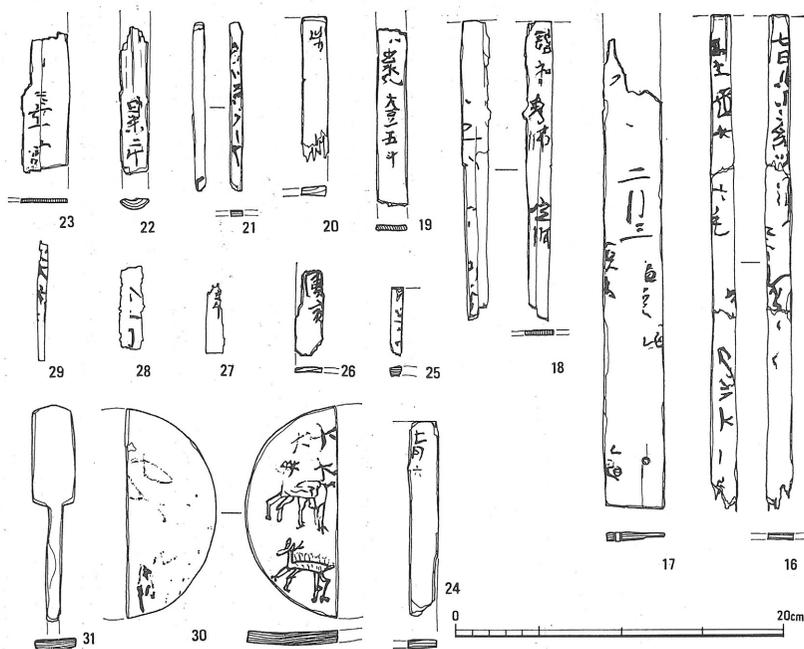
8 木簡の积文・内容  
一 第五七次調査区

- |     |                 |                      |
|-----|-----------------|----------------------|
| (1) | 「亀六年難<br>(題籤軸)  | (56) × 31 × 5 061    |
| (2) | ・「〇漬芹」<br>・「〇□」 | 85 × 39 × 5 011      |
| (3) | 「〇可充紙□□         | (96) × 34 × 2 019    |
| (4) | 十一」             | (105) × (29) × 3 081 |
| (5) | 「八<br>〇」        | 310 × 38 × 5 011     |
| (6) | 「〇右             | (95) × 26 × 6 019    |
| (7) | 「〇□」            | 117 × (18) × 5 051   |



1993年出土の木簡

(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	
五斗			「十二月 [六カ]		白米二斗			〔出水郷カ〕 大豆五斗	 定	二月三 [日カ]
	(52) × 17 × 3	(42) × (7) × 6	(120) × (19) × 5	(42) × (7) × 6	(90) × 16 × 7	(105) × (8) × 4	(90) × (16) × 7	(110) × 15 × 4	(186) × (15) × 3	(290) × 35 × 5
091	081	081	081	081	081	081	081	081	081	019



第64次調査区出土木簡

(28)



191

(29)



191

(30)



(鹿の絵)



(女性の人物画か)



(記号か)

(140) × (50) × 8 191

井戸枠内から三五点の木簡が出土した。その大部分は削屑である。

(16)は文書木簡と考えられる。表裏に墨書が残るが、表面が削られ読めない。(17)は短冊状の薄板の片面に墨書が残る。上半を欠損するが、下端には木釘が二カ所に残る。文字は三行あり両端の二行は左右に切れていることや木釘があることから、板を三枚以上横に並べ棧を渡し、木釘で留め組板状にしたものの片面に書かれていたものと思われる。木組の形態から見て、木箱の蓋の可能性がある。(18)は表裏に墨書したものと思われるが、表面が薄く削られておりほとんど読めない。「定□」は人名か。(19)は両端を欠損する。『和名類聚抄』によればイズミ郷は三カ所知られ、うち大安寺に関連するイズミ郷には山城国相楽郡水泉郷がある。「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」の「庄」の項に「泉木屋并園地二町」の記載があり、大安寺の木屋と

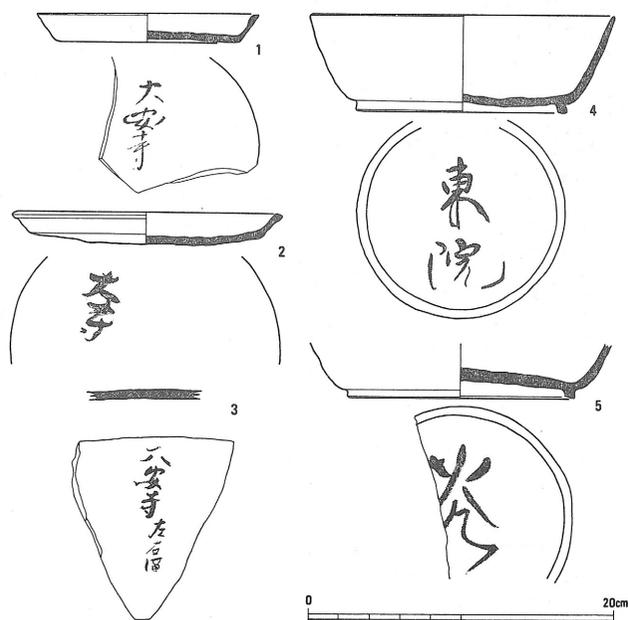
園地がおかれていたことがわかる。今回出土した木簡はこの園地か

らの荷札の可能性はある。なお、同郷は『続日本紀』宝亀元年十二月乙未条には「出水郷」と表記されており、今回の木簡の表記と一致する。(22)は表皮の残る径〇・九cmの芯もち材を割り裂き、その割り面に「白米二斗」と墨書している。両端を欠損するためその全容はわからないが、付札として使用されたものであろう。(20)(23)(25)は片面に、(21)は両面に墨書が残る。いずれも破片のため読めない。(24)は片面の一部に墨書がある。(30)は小型の曲物底板の両面に墨書が残る。片面には鹿二頭の墨画と「大」の字を習書し、もう片面には人物の墨画と、意味不明の墨書がある。人物画は不鮮明であるが、女性像の可能性はある。図の31は題籤軸であるが、表面が削られ墨痕は残っていない。

### 9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成五年度』(一九九四年)

(1) 7・9 三好美穂  
8 篠原豊一



第57・64次調査区出土墨書土器